

Title	精研式パーソナリティ・インベントリの改訂と再標準化
Sub Title	Revision and re-standardization of the SEIKEN-SHIKI personality inventory
Author	槇田, 仁(Makita, Hitoshi) 小林, 和久(Kobayashi, Kazuhisa) 伊藤, 隆一(Itoh, Ryuichi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1984
Jtitle	哲學 No.79 (1984. 12) ,p.189- 210
JaLC DOI	
Abstract	The SEIKEN-SHIKI Personality Inventory (INV) was published in 1960. The INV is intended to measure the personality types (cyclothymia, schizothymia, viskOses temperament, hysterical character and nervousness), based on the theories of personality typology by Kretschmer, Sheldon and Sano Makita. At the suggestion of the users reporting differences of percentages of personality types between 1960's and today's data, we restandardized the INV, and revised some of the items as well as its scales. The number of subjects is 3674 (male : 2028, female : 1646), including senior high school students, university students, and employees of companiess. Although the result shows that the percentages of personality types are different from those of 1960's, it is nonetheless significant. Factor Analysis of the items proves that each type above mentioned is generally extracted as a factor.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000079-0189

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

精研式パーソナリティ・
インベントリの改訂と再標準化****

楨田 仁*・小林和久**・伊藤隆一***

Revision and Re-standardization of the
SEIKEN-SHIKI Personality Inventory

Hitoshi Makita · Kazuhisa Kobayashi · Ryuichi Itoh

The SEIKEN-SHIKI Personality Inventory (INV) was published in 1960. The INV is intended to measure the personality types (cyclothymia, schizothymia, *visköses* temperament, hysterical character and nervousness), based on the theories of personality typology by Kretschmer, Sheldon and Sano & Makita.

At the suggestion of the users reporting differences of percentages of personality types between 1960's and today's data, we restandardized the INV, and revised some of the items as well as its scales.

The number of subjects is 3674 (male: 2028, female: 1646), including senior high school students, university students, and employees of companies.

Although the result shows that the percentages of personality types are different from those of 1960's, it is nonetheless significant.

Factor Analysis of the items proves that each type above mentioned is generally extracted as a factor.

* 慶應義塾大学文学部教授 (人間科学専攻)

** 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程 (社会学専攻)

*** 慶應義塾大学大学院社会学研究科研究生 (社会学専攻)

**** 当研究に用いられたデータの収集にあたっては多数の高校・大学・企業に御協力いただいた。特に金子書房前編集長菊池正美氏には格別の御配慮・御尽力をいただいた。ここに深く感謝の意を表わす次第である。

データの分析にあたっては、慶應義塾大学社会学研究科博士課程・兼高聖雄君、同修士課程岩熊史朗君に御援助いただいた。改めて御礼を申し述べたい。なお、データの整理にあたっては、楨田ゼミナール14期生(1983年度卒)・15期生(現4年生)に協力いただいた。心から感謝の意を表わしたいと思う。

I 序

1. 1 精神医学研究所式パーソナリティ・インベントリ

心理臨床において、パーソナリティを如何に把握し、如何に診断を行なうかは重要な問題である。我々は診断の対象として一応のシエマを考え(図1a参照)、そのシエマの内容によって種々のテストを組合せて施行し、それらの総合から診断を行なう試み(図1b参照)を多年続けてきた。(佐

a. 診断の対象

パーソナリティ				決定要因			
能力的	情意的	指向的	力動的	個体的	環境的		
知能、精神的分化 見通し 評価の客観性等	気質、性格等 すなわち、性格類型(特性)等 比較的固定的なもの	目標、キャセクション 人生観等 生活態度、価値観	安定—不安定 コンプレックス等	容姿、体力 健康等	家庭的 家族 生活水準等 生育歴とその環境	社会的 社会生活 交友関係等	

b. テストの適用範囲

知能テスト	■						
S C T	▨	▨	▨	▨	▨	▨	▨
I N V		■		▨			
T A T (PRT)		▨	▨	■	▨	▨	▨
DOSEFU		■					

黒い部分はそのテストが主に狙った範囲、斜線の部分はある程度調べる範囲、白い部分は調べにくい範囲を示す。

図1 診断の対象 [槇田(1982)より]

野・榎田, 1955; 佐野・榎田, 1960; 佐野・榎田・坂部, 1960; 佐野, 1965; 榎田, 1982など)

言うまでもなく、パーソナリティのとらえ方には様々な立場があるが、佐野勝男・榎田仁らはパーソナリティを種々の能力の発達とともにその構造や機能も次第に分化・成長していく個人の総体としてとらえ、そのさまを乳児期・幼児期・少年期・青年期といった各発達段階に分け、たどっていくことの必要性を説いている。そして、彼らはパーソナリティ診断の立場から、パーソナリティの“内容”を、能力的・情意的・指向的・力動的の各側面に分けると同時に、それを形づくるもととなる種々の個体的・環境的要因を“決定要因”としてとらえようとしている。我々がここでとりあげる精神医学研究所式パーソナリティ・インベントリィ(精研式 INV または INV と略称)は、このうち情意的側面、すなわち、遺伝や体質と関連の深い、比較的変わりにくい側面をとらえる役割をもっているものである。

パーソナリティの情意的側面をとらえる試みは、多くの研究者によって古くからなされてきた。(たとえば, Kretschmer, 1922, 1955; Sheldon ら 1940, 1942; Cattell, 1950など) 佐野・榎田らは、これらの研究をふまえながら、比較的簡単に人間を“診断”・“理解”することを目的に、INVの診断の対象となる精神医学的性格類型を唱えた。彼らはその類型として、循環性(Z), 分裂性(S), 粘着性(E), さらに力動的側面に関連のある、ヒステリー(H), 神経質(N)の5種を考慮しており、各々その大きな特徴として、Zの同調・両極, Sの内閉・両面, E, 粘着・爆発, Hの小児性・顕耀性, Nの不安定・劣等感などをあげている。

INVは質問紙法によるテストであるが、現在の形を整えるまでに、さまざまなテスト形式を試行している。また、問題文の選定にあたっては、数名の精神医学者・心理学者の意見を参考にし、質問文の感度を検討するために、学生を対象とした実験をくりかえし行なっている。(佐野・榎田・坂部, 1956)

パーセンタイル値の算出・データの標準化も、1960年のINVの出版以前に、何度かデータの取り増しをしながらくりかえし行なわれ、かなり一貫した値が出されている。(佐野・榎田・三好, 1959; 佐野・榎田・坂部, 1960)

1. 2 INV再標準化の目的

INVは1960年に現在用いられている形にまとめられた。しかしながら、近年、施行者の中から得点の分布に幾分か変化があるのではないかという声が寄せられていた。(たとえば、Zの比率が増加したのではないかという指摘)そこで、今回、新たに標準化を行ない、得点の分布を検討することにした。同時に、幾分か難解な表現の見られる質問文について改訂を加え、「記入の仕方」も変更することにした。

II 方 法

2. 1 質問文の改訂

今回の改訂では、表現が難解であったり古めかしく感じられる質問文について幾分かの修正を加えた。ただし、各質問文の内容は従来そのままとした。

以下に、各類型毎に質問文を載げる。質問文の後の()内に示したものは、各質問文のあらわす特性である。

Zの質問文

- 1 あなたは 考え方や性格の違う人とでも、気軽につき合う方ですか。
(融和性)
- 6 あなたは ちょっとした世話役などを、苦にしないでやる方ですか。
(世話好き)
- 11 あなたは 哀れな話を聞いた時など、すぐ同情して何かしてあげる方ですか。(同情的)
- 16 あなたは あわてん坊で、よくやりそこなったりする方ですか。(不注意)

- 21 あなたは よくお人善しなどと言われる方ですか。(お人善し)
- 26 あなたは 落ち着いて理屈を考えるよりは、実際にからだを動かすのが好きな方ですか。(行動性)
- 31 あなたは 次から次へと気持のひかれるままに手をつけていく方ですか。(活動的)
- 36 あなたは いつもは陽気に活動しているのに、時々しょげることがありますか。(循環性)
- 41 あなたは 初めて会った人にでも、すぐに親しみを感じる方ですか。(社交性)
- 46 あなたは 気軽に冗談を言ったり、はしゃいだりする方ですか。(諧謔)

E の質問文

- 2 あなたは 何か始めると、こつこつ粘り強くやる方ですか。(粘着)
- 7 あなたは どちらかというと融通がきかないなどと言われる方ですか。(融通性がない)
- 12 あなたは 几帳面な方で、机の上のものなど曲がっていると、そのままでは気がすまない方ですか。(几帳面)
- 17 あなたは 掃除などは、いつも徹底的にしないと気がすまない方ですか。(徹底性)
- 22 あなたは興奮してくると、自分がおさえられなくなりがちの方ですか。(興奮性)
- 27 あなたは 怒りがこみあげてくると、かっとなってしまふ方ですか。(易怒性)
- 32 あなたは 物事をあくまで追求し、とにかく、しつこくなりがちの方ですか。(執拗)
- 37 あなたは 何かやり始めると、きりがなくなって仲々やめられない方

ですか。(熱中性)

42 あなたは ひとつの事に夢中になると、それが終わるまでは他のことは考えられない方ですか。(視野狭小)

47 あなたは とかく物事を堅苦しく考え、手際よく処理できない方ですか。(堅苦しき)

S の質問文

3 あなたは ひとりでいてもあまり寂しくない方ですか。(孤独性)

8 あなたは ぼさっとしている方だけれど、自分の関心のある面には、よく気がつく方ですか。(鈍感)

13 あなたは 冷たい感じで他人に親しみにくいなどと言われる方ですか。(貴族性)

18 あなたは からだを動かすよりは、むしろ理屈を考えたりするのが好きな方ですか。(思考性)

23 あなたは ぼうっと何かを考えて、自然に時がたってしまったりするようなことが、よくある方ですか。(空想性)

28 あなたは 自分の趣味などにはデリケートなのに、関心がないことについては、まるで無頓着の方ですか。(無関心)

33 あなたは 他人の心配事や悩みなどに対して、割合に冷淡でいられる方ですか。(冷淡)

38 あなたは 新しい環境に入った時など、人とうちとけにくい方ですか。(非社交性)

43 あなたは みなが愉快地遊んだりしている時でも、自分のやりたいことがあればそれを勝手にしている方ですか。(利己的)

48 あなたは 別に悪気がないのに、他人の痛い所をついたりする方ですか。(辛辣)

Hの質問文

- 4 あなたは 評判になった本などは、一応、知っている方ですか。(顕
耀性)
- 9 あなたは 負けずぎらいで、スポーツや遊び事でも負けると口惜しく
て仕方がない方ですか。(勝気)
- 14 あなたは 甘えん坊ですか。(甘えん坊)
- 19 あなたは わりにわがままを通してもらえる方ですか。(我儘)
- 24 あなたは 小説などを読むと、自分が主人公になったような気がする
方ですか。(被暗示性)
- 29 あなたは 派手な服装が似合う方ですか。(虚栄)
- 34 あなたは 社交的な方けれども、人の好き嫌いははっきりしている
方ですか。(好き嫌い)
- 39 あなたは 周囲の人の理解があったら、もっと才能を伸ばせたのにと
思うようなことがありますか。(自己中心性)
- 44 あなたは 他人に誤解されたりして口惜しい思いをすることがよくあ
りますか。(無反省)
- 49 あなたは 困っているのにだれも助太刀してくれないと、うらめしく
思うようなことがありますか。(依存性)

Nの質問文

- 5 あなたは 心配性で、からだの具合などを人一倍気にする方ですか。
(心気性)
- 10 あなたは 人より劣っているように思えて、新しい事など思い切って
できない方ですか。(劣等感)
- 15 あなたは 何かちょっとしたことなどで、とかく悪い方ばかり考えが
ちな方ですか。(取越苦勞)
- 20 あなたは 粘りがなく、ちょっとした困難にぶつかると、へこたれや

すい方ですか。(非永続性)

25 あなたは ちょっとした事でも焦りを感じたりする方ですか。(焦慮感)

30 あなたは 何かで失敗したような時、その原因がどうも自分にあるような気がする方ですか。(自責性)

35 あなたは 何か言いたい時でも、他人の思わくを考えて、つい言いそびれてしまう方ですか。(気兼ね)

40 あなたは 自分の欠点などを克服しようと、いろいろしてみるが、結局、意志が弱くて続かない方ですか。(意識過剰)

45 あなたは 自分の思い通りにできないような時、結局あきらめてしまう方ですか。(忍従)

50 あなたは 何かうまくいかなかった事を、いつまでも愚痴っぽくこぼす方ですか。(愚痴っぽさ)

2. 2 「記入の仕方」の改訂

従来の記入の方法は、0点(普通だ)、1点(かなりそうだ)、2点(全くそうだ)の3段階で解答させ、その特性が「反対だ、とか、まるでない」という時に、×印をつけさせる型式であった。しかし、×印をつける者は非常に少なく、×、0、1、2という記入の仕方にとまどいをみせる被験者も少なからずみられた。そこで、今回は通常の4段階で解答させる型式を採用した。

次のページに、改訂された「記入の仕方」を掲げる。ここでは、0から3の自分の該当する所に○をつけるようになっている。

2. 3 被験者

被験者は、高校生1520名(M:921名, F:599名)、大学生1246名(M:558名, F:688名)、社会人908名(M:549名, F:359名)の計3674名である。これらデータは、数多くの集団から収集し特定の集団にサンプルが偏らないように留意した。

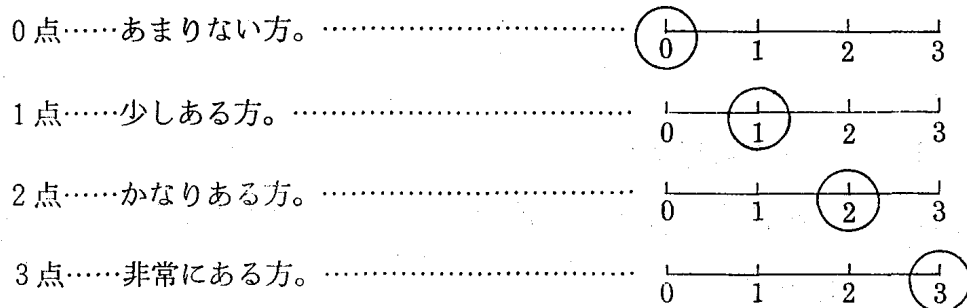
< 記入の仕方 >

この用紙には、50の場面の質問が書いてあります。それらの質問をよく読んで、右側の線の上に自分の答えを、○をつけて下さい。

答えのつけ方は、例を見ればわかるように、0点から3点の間の、どこか自分に合った所に、○印をつければよいのです。

0点、1点、2点、3点、の大体の規準を示すと、

[例]



[例] のように“あまりない方”という時は0，“少しある方”という時は1，“かなりある方”という時は2，“非常にある方”という時は3に、○をつけて下さい。

2. 4 データの再標準化

得られたデータを個人別に集計し、それらを高校生・大学生・社会人別に分け、各類型の得点の10パーセントイル値・20パーセントイル値を算出した。

次に各被験者の性格類型の分類であるが、各類型とも、10パーセントイル値以上の得点を大文字で示し、20パーセントイル値以上、10パーセントイル値未満の得点を小文字で示すのが原則である。分類にあたっては、各被験者の基本類型であるZ・E・Sについて、大文字1ないし2、小文字1ないし2を持つ者を類型とした。例えば、Z・ZE・ZEs・Zs・Zes・s・seが類型であり、ZESやzesは、M (Miscellaneous) とした。な

お、H・Nに関しては、10・20パーセンタイル値を越える得点を示せば、それぞれ大文字・小文字で、Z・E・Sの類型に付加させた。Z・E・Sの得点が、すべて20パーセンタイル値未満であっても、H・Nが10・20パーセンタイル値以上の得点であれば、単独でも類型(H・N・HN・Hn・hn・h・n)とした。

2.5 質問項目の因子分析

INVの質問項目と設定された精神医学的性格類型との間の構造を探るために、全被験者のデータをもとに、因子分析を行った。

III 結 果

3.1 データの再標準化

総合および高校生・大学生・社会人それぞれの各類型別の得点分布・パーセンタイル値を表1～5に示す。

この結果から、高校生・大学生・社会人の得点の分布に幾分か差異があることが認められる。(なお、男女差は、高校生・大学生・社会人ともにほとんどみられなかった)この理由から、各被験者の性格類型の分類は、それぞれ別個の規準パーセンタイル値に基づいて行なった。

全被験者3674名の類型について整理・分類を行なえば、表6・7・8に示す通りとなる。

この結果によれば、Zの性格類型は、11.1%、Eは5.9%、Sは8.3%、Hは4.7%、Nは6.5%であり、はっきり性格類型に分類されうるものが、36.5%である。この他、2つ以上の類型にわたって分類されるもの(混合型)を含めれば、52.6%の人が各類型に分類されることがわかった。

この結果を、旧版の「パーソナリティインベントリィの手引」(佐野・楨田・坂部、1960)の性格類型の分類の率と比較すると、Sが増加し、Eが減少し、Z・Nが微増、Hがわずかに減少したといった変化がみられる。しかし、混合型を含めてみると、その差は問題にならない程度のもの

表 1. 各類型別の得点分布 (総合)

得点	Z	E	S	H	N
0	1人	6人	2人	4人	8人
1	5	13	6	7	16
2	6	27	20	18	36
3	12	48	32	46	69
4	20	67	83	73	80
5	39	101	132	109	139
6	53	150	162	156	160
7	63	162	218	191	174
8	112	218	269	257	210
9	158	234	318	287	263
10	205	283	313	297	239
11	219	302	286	318	275
12	264	308	264	285	292
13	268	273	270	319	280
14	301	285	249	286	230
15	290	276	232	262	191
16	275	200	174	226	224
17	258	183	167	141	176
18	242	146	134	111	143
19	232	119	91	103	128
20	183	75	78	62	93
21	144	67	55	53	77
22	111	57	39	20	51
23	68	29	28	14	32
24	71	16	22	12	27
25	34	12	15	10	34
26	17	6	7	4	14
27	15	4	7	2	8
28	3	6	0	0	2
29	3	1	0	1	3
30	2	0	1	0	0

(N=3674)

表 2. 各類型別の得点分布 (高校生)

得点	Z	E	S	H	N
0	1人	1人	1人	2人	2人
1	4	2	2	4	7
2	3	6	12	10	13
3	4	22	14	26	24
4	11	27	40	36	30
5	15	33	72	52	46
6	25	63	58	74	58
7	24	63	100	92	56
8	50	94	114	113	88
9	75	101	147	121	113
10	84	119	110	130	91
11	91	118	121	119	116
12	102	143	115	118	117
13	127	113	107	128	123
14	121	123	90	121	91
15	127	101	98	92	84
16	109	100	78	84	99
17	116	72	60	57	78
18	98	71	54	44	68
19	80	41	26	34	57
20	74	30	29	17	39
21	58	24	26	18	47
22	44	29	11	9	23
23	27	14	10	7	19
24	27	4	10	5	9
25	12	1	8	3	8
26	5	2	3	2	6
27	4	1	3	1	5
28	1	2	0	0	2
29	1	0	0	1	1
30	0	0	1	0	0

(N=1520)

表 3. 各類型別の得点分布 (大学生)

得点	Z	E	S	H	N
0	0人	1人	0人	1人	2人
1	1	8	1	2	4
2	2	11	4	6	12
3	6	14	10	12	18
4	4	24	20	19	28
5	12	41	29	28	46
6	15	43	51	43	52
7	23	52	55	49	52
8	38	73	74	73	60
9	52	58	98	105	72
10	68	98	108	87	68
11	69	95	90	100	86
12	92	95	92	96	108
13	78	89	86	102	91
14	94	85	101	99	81
15	98	112	78	103	70
16	95	57	66	99	84
17	78	70	66	47	69
18	88	53	57	43	57
19	86	55	44	50	48
20	63	25	36	28	37
21	51	33	23	27	25
22	50	22	25	8	23
23	28	5	12	7	8
24	29	8	9	4	15
25	9	11	6	6	19
26	8	3	2	1	6
27	5	1	3	1	3
28	2	3	0	0	0
29	1	1	0	0	2
30	1	0	0	0	0

(N=1246)

表 4. 各類型別の得点分布 (社会人)

得点	Z	E	S	H	N
0	0人	4人	1人	1人	4人
1	0	3	3	1	5
2	1	10	4	2	11
3	2	12	8	8	27
4	5	16	23	18	22
5	12	27	31	29	47
6	13	44	53	39	50
7	16	47	63	50	66
8	24	51	81	71	62
9	31	75	73	61	78
10	53	66	95	80	80
11	59	89	75	99	73
12	70	70	57	71	67
13	63	71	77	89	66
14	86	77	58	66	58
15	65	63	56	67	37
16	71	43	30	43	41
17	64	41	41	37	29
18	56	22	23	24	18
19	66	23	21	19	23
20	46	20	13	17	17
21	35	10	6	8	5
22	17	6	3	3	5
23	13	10	6	0	5
24	15	4	3	3	3
25	13	0	1	1	7
26	4	1	2	1	2
27	6	2	1	0	0
28	0	1	0	0	0
29	1	0	0	0	0
30	1	0	0	0	0

(N=908)

表 5. 各類型のパーセンタイル値

		Z	E	S	H	N
総 合	10パーセンタイル	21点	19	19	18	20
	20パーセンタイル	19点	17	16	16	17
高 校 生	10	21	19	18	18	20
	20	19	17	16	16	18
大 学 生	10	22	20	20	19	20
	20	20	18	17	17	18
社 会 人	10	21	18	18	18	18
	20	19	16	15	16	15

(各類型の得点は0-30点に分布する)

である。また、前回は48%の人がいずれかの性格類型に分類されたが、今回は52.6%で、4.6%の増加であるが、これは類型規準を変更したためのもとも考えられ、特に注目すべき変化ではないように思われる。

被験者の約半数の人間を基本的性格に分けうるというのは、まず常識的に考えられる率ではないかと思う。むろん、規準をゆるめれば80%ぐらいも分類しえないことはないが、それでは少し作為的すぎ、まず半数は類型に分けられ、あとはMと考える方が自然ではないかと考えられる。

以上述べてきたように、問題文の一部改訂および「記入の仕方」の改訂を行ない、新しいパーセンタイル値の設定を行なったわけであるが、高校生・大学生・社会人のそれぞれのパーセンタイル値は、幾分が異なった値を示すことがわかった。また、各性格類型人数のパーセンテージは、前回とは若干の変動はあるものの、全体としては、被験者の約半数のものが各類型に分類されうる点では前回とほぼ同様であった。

表 6. Z・E・S・H・Nの諸類型に属する人数

循環性	人 数				%
Z	150	310			
z	160				
Z h	33	98	408	11.1	
e	17				
n	14				
s	7				
e h	5				
e n	4				
e s	4				
h n	3				
s h	3				
s n	3				
e h n	2				
s h n	1				
e s h	1				
e s h n	1				

ヒステリー	人 数				%
H	36	96			
h	60				
H z	16	76	172	4.7	
e	11				
s	10				
z n	7				
n	7				
s n	5				
s e	4				
e n	4				
z e	3				
z s	3				
e s n	3				
z s n	2				
z e n	1				

粘着性	人 数				%
E	58	142			
e	84				
E z	17	73	215	5.9	
s	17				
n	13				
h	9				
z h	6				
s n	5				
z n	2				
s h	2				
s h n	1				
z s	1				

神経質	人 数				%
N	79	176			
n	97				
N s	24	64	240	6.5	
e	9				
z	7				
h	7				
s h	5				
s e	3				
z h	3				
z e	2				
z s	2				
e h	1				
s e h	1				

分裂性	人 数				%
S	86	242			
s	156				
S n	20	64	306	8.3	
h	13				
e	12				
z	6				
e h	4				
z n	3				
z h	2				
h n	2				
e n	1				
z h n	1				

表 7. 表 6 以外の混合型に属する人数

Z E	10	78	E S z H	2	40
z e	17		H n	1	
Z E h	5		N	1	
h n	5		H N	1	
h n	2		40	E H	11
s	2			e h	14
s h	2			E H z	4
s n	1			s	3
H N	8			n	3
H	5			z s	3
N	4		39	s n	2
N h	4			E N	5
H n	4			e n	17
H n	2			E N s	6
Z E s H	4	23	s h	4	
N	3		z	3	
N h	2		z s	2	
H n	2		h	2	
Z S	4	64	E H N	3	
z s	8		e h n	2	
Z S h	1		E H N s	3	
n	1		z	2	
H	3		z s	1	
H n	2		47	S H	17
N h	1	s h		19	
Z S e N	2	S H n		6	
N h	1	e		4	
Z H	28	26	z n	1	
z h	20		S N	22	
Z H e	10		s n	25	
n	3		S N e	9	
s	1		h	6	
e s	1	109	z	3	
e n	1		e h	3	
Z N	9		z e	1	
z n	10		30	S H N	14
Z N e	3	s h n		1	
s	1	S H N e		7	
h	1	z		5	
s h	1	20	z e	3	
e h	1		z e h	8	
E S	16		n	4	
e s	18		h n	1	
E S n	5		z s h	3	
h	4		n	1	
z	3		e s n	3	
h n	2		27	H N	4
N	23	h n		11	
H	10	H N s		6	
H N	9	z e		3	
N h	9	109	e s	3	
H n	5				

表 8. 表 6 表 7 の概括 (各類型別人数表)

類 型		実 数		%	
Z	Z	310	408	11.1%	36.5% (33.6%)
	Z+小文字	98		(9.8%)	
E	E	142	215	5.9%	
	E+小文字	73		(8.7%)	
S	S	242	306	8.3%	
	S+小文字	64		(4.5%)	
H	H	96	172	4.7%	
	H+小文字	76		(5.0%)	
N	N	176	240	6.5%	
	N+小文字	64		(5.6%)	
Z E		78		2.12%	16.1%
Z S		23		0.62%	
Z H		64		1.74%	
Z N		26		0.71%	
Z H N		9		0.24%	
E S		109		2.97%	
E H		40		1.09%	
E N		39		1.06%	
E H N		10		0.27%	
S H		47		1.28%	
S N		69		1.88%	
S H N		30		0.82%	
H N		27		0.73%	
その他		22		0.60%	
M		1740		47.4%	
合 計		3674		100.0%	

(() 内は、「パーソナリティ・インベントリの手引き」(佐野・楨田・坂部, 1960) のデータ)

3. 2 質問項目の因子分析

質問項目の因子分析の最終因子負荷量を表 9 に示す。

おおまかにみれば, 抽出された 5 因子は, 第 1 因子は N, 第 2 因子は H, 第 3 因子は Z, 第 4 因子は E, 第 5 因子は S にほぼ対応する。なかでも, 第 1 因子で, N の 10 項目すべてが, 35 以上の因子負荷量を示していることが注目される。この第 1 因子の寄与率は, 35.9% と他に比べ著しく大

表 9. 項目の因子分析：因子負荷量

	FACTOR 1	FACTOR 5	FACTOR 4	FACTOR 3	FACTOR 2
15 (N)	0.60				
25 (N)	0.58				
10 (N)	0.56				
40 (N)	0.54				
47 (E)	0.53				
30 (N)	0.50				
27 (E)		0.59			
22 (E)	0.26	0.55			
41 (Z)			0.62		
46 (Z)		0.27	0.53		
1 (Z)			0.51		
2 (E)				0.63	
18 (S)					0.69
26 (Z)		0.26			-0.56
43 (S)		0.28			0.41
33 (S)		0.27			0.32
13 (S)			-0.30		0.30
19 (H)		0.31			0.29
32 (E)				0.48	0.28
23 (S)	0.42				0.28
48 (S)		0.43			
28 (S)		0.30			
3 (S)					
7 (E)	0.32				
4 (H)					
9 (H)		0.32		0.39	
38 (H)	0.39		-0.33		
20 (N)	0.47			-0.40	
44 (H)	0.39	0.27			
24 (H)	0.25		0.25		
8 (S)					
39 (H)					
45 (N)	0.44				
11 (Z)			0.40		
31 (Z)		0.38			
42 (E)				0.42	
37 (E)				0.45	
50 (N)	0.49	0.28			
14 (H)	0.31				
5 (N)	0.35				
34 (H)		0.39			
6 (Z)			0.46		
35 (N)	0.49				
16 (Z)	0.36	0.29			
49 (H)	0.44	0.25			
29 (H)		0.30	0.27		
21 (Z)	0.29		0.40		
36 (Z)	0.38	2.27	0.25		
12 (E)				0.38	
17 (E)				0.44	
固有値	6.58	3.14	1.94	1.38	1.12
寄与率	35.9 %	17.1 %	10.6 %	7.5 %	6.1 %
累積寄与率	35.9 %	53.1 %	63.6 %	71.2 %	77.3 %

(0.25以上の値を掲載した)

きく、全体の変動の約3分の1が説明されることを示している。

さらに詳しくみていくと、第1因子では、Nの質問項目以外でも、かなり高い因子負荷量を示しているものがみられる。Eの「47：堅苦しき」や「7：融通性がない」といった質問項目は、Nの持つ“硬さ”等に相通じるものがあり、第1因子の負荷量が高いのも十分に理解できる。Sの質問項目である「23：空想性」、「38：非社交性」もまた、Nの持つ“行動の抑制”に通じるものがある。しかしながら、Zの質問項目である、「36：循環性」、「16：不注意」、「21：お人善し」や、Hの質問項目である、「49：依存性」、「44：無反省」などは、類型論の観点からすると、通常対極に位置するものと考えられる。これは、1つには質問文の解釈にもよっているものと思われる。例えば、「36：循環性」の質問文は、「あなたはいつもは陽気に活動しているのに、時々しょげることがありますか」であるが、これを前提部を見過ごし、「しょげることがありますか」といった質問文と解釈すれば、Nの因子と推定される第1因子で大きな因子負荷量を示していることも納得の行くところである。なお、この「36：循環性」は、第2因子(H)・第3因子(Z)でも比較的大きな因子負荷量を示しており、同一の質問文が多義的に解釈・評価されたことを示唆している。このように、被験者の質問文の解釈と、作成者の意図した意味との間に、ある種の齟齬が生じた質問項目もいくつかみられた。

第2因子では、Hの質問項目以外では、Eの「22：興奮性」や「27：易怒性」が因子負荷量が大いだが、これらは、Hの“勝気”等に相通じるものがある。また、Sの「48：辛辣」や「28：無関心」・「43：利己的」・「33：冷淡」といった質問項目も因子負荷量が大い。これらは、いずれもSの性格特性のうち、“両面性”の範疇に入る点で共通性があり、Hの“自己中心性”・“好き嫌いの激しさ”に相通じるものがある。このほか第2因子では、Zの「31：活動的」・「16：不注意」・「36：循環性」等の因子負荷量が大い。しかし、これらは即座にHの性格類型とは結びつけることは

できないように思われる。

第3因子以下では、第1・2因子に比べて、より多くの他の種類の項目が混在している。これは、先に述べた“解釈の齟齬”も理由の1つに考えられるが、5つの因子が、完全には5つの性格類型に対応しているわけではないことを示唆している。ともあれ、Z・E・S・H・N各々の質問項目の大半は、それぞれ因子としてまとまりを示し、このINVの妥当性をある程度立証することができた、と言えよう。

IV 考 察

はじめにも述べたように、かねてから施行者から、得点の分布に変化があるのではないかとの指摘がなされていたが、今回のデータからは性格類型の比率に変化がみられたと結論づけることはできなかった。先に述べたように、「記入の仕方」等の変更点もあり、また、混合型も含めれば、比率の変化自体、非常に少なかったからである。

パーセンタイル値は、全体としてみればZの値が最も高く、次いでNの値が高いと言った点では変化はなく、分布の型にも際立った変化は見られなかった。ただし、今回、高校生・大学生・社会人相互間にいく分か違いが見られ、分類にあたってはそれぞれ別個の規準を設けた。

因子分析の結果から、各性格類型の質問項目は、おおむね因子としてまとまりを示し、一定の妥当性を示しているとみることができる。ただし、詳細に検討すると、各因子にはいくつかの性格類型の質問項目が混在していた。しかし、これらは、性格類型こそ異なるものの、内容的には類似した項目である場合も少なくなく、ある程度は予測しうることはあった。はじめにこのINVを作成するにあたっては、まず精神医学専攻の医師3名によって質問項目が選定され、学生を被験者とする一連の実験によって質問項目の各評点の散布度が検討されているが、今回の因子分析からある程度その妥当性を裏付けることができたと言えよう。

以上、問題文の改訂・「記入の仕方」の変更に伴うパーセントイル値の変動・諸類型の比率、そして質問項目の因子分析について述べてきたが、今回の改訂により INV は一定の妥当性を持っていることが明らかになった。今後、ひき続き、質問文の検討・被験者集団に応じた規準の設定等を追求して行きたい。

文 献

- Cattell, R. B. 1950 *Personality: A systematic theoretical and factual study*. New York: Mc Graw Hill.
- Kretschmer, E. 1922 *Medizinische Psychologie*. Stuttgart: Thieme. (西丸四方・高橋義夫訳 1955 医学的心理学 I・II みすず書房)
- Kretschmer, E. 1955 *Körperbau und Charakter*, 21/22 Auff. Berlin: Springer. (相場 均訳 1960 体格と性格 文光堂)
- 榎田 仁 1982 S C T筆跡による性格の診断——表出行動についての基礎的研究—— 金子書房
- 佐野勝男 1965 性格の診断——人をみぬく知恵—— 大日本図書 (現代心理学ブックス)
- 佐野勝男・榎田 仁：臨床心理に於けるテスト・バッテリーの構成——基礎的問題に関する二・三の考察—— 精神医学研究所業績集 第2輯, 1955, 61—82.
- 佐野勝男・榎田 仁・坂部先平：パースナリティ・インベントリィの研究 その一——性格類型論, テスト型式の問題並びに精研式 INV の構成 精神医学研究所業績集 第3輯, 1956, 99—111.
- 佐野勝男・榎田 仁・三好邦雄：パースナリティ・インベントリィの研究 その二——質問文の改正及びパーセントイル値の変動—— 精神医学研究所業績集 第6輯, 1959, 59—65.
- 佐野勝男・榎田 仁 1960 精研式文章完成法テスト解説——成人用—— 金子書房
- 佐野勝男・榎田 仁・坂部先平 1960 精研式パースナリティ・インベントリィの手引 金子書房
- Sheldon, W. H., Stevens, S. S., and Tucker, W. B. 1940 *The varieties of human physique*. New York: Harper.
- Sheldon, W. H., and Stevens, S. S. 1942 *The varieties of Temperament*. New York: Harper.